

令和8年度なはSDGs推進事業 助成事業募集説明会 過去助成事業採択団体（那覇市版 SIB 実施団体）事業紹介



- ・ 日時：令和8年5月26日（火）19:00-20:30
- ・ 場所：なは市民活動支援センター会議室1
- ・ 過去助成採択団体（令和6年助成事業実施、令和7年SIBプロジェクト実施）
 - 一般社団法人琉球フィルハーモニック 代表理事 上原正弘 氏
 - 労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団沖縄事業所 城間えり子 氏
- ・ 司会：平良斗星（公益財団法人みらいファンド沖縄 副代表理事、那覇市版SIB伴走支援者）

■琉球フィルハーモニックの助成事業（吹奏楽部の地域移行）



- 令和6年度助成事業は、中学校の吹奏楽部を中心とした音楽系部活動の地域移行に関する調査を実施。学校や関係者のニーズ・課題を明確にし、次年度のSIBプロジェクトの本格的な調査の論点整理に役立てることを目的としました。
- 校長先生や吹奏楽部顧問、指導者、若狭地域の方へのアンケート、若狭公民館・若狭児童館、音楽団体へのヒアリングを実施。地域連携の機会が多く、翌年に地域クラブ活動を行う那覇中学校と上山中学校があるため、若狭地域に限定して展開しました。
- 調査では、地域移行に関しては一定の課題を感じているものの、教員の負担軽減や指導の高度化など、部活の地域移行の意義やメリットを感じており、部活動の地域移行を好意的に捉えていました。課題やニーズに対しても類似するものが多く、人・物・運営費の視点で整理すると以下のものが挙げられました。
 - 人：指導人材の確保・育成の仕組みづくり、多様な子どもへの対応体制整備、保護者や地域住民への負担軽減等
 - 物：吹奏楽部が活動できる施設・設備の整備、マニュアルやガイドラインの整備等
 - 運営：指導者への安定した報酬制度の確立、楽器修繕や消耗品費用への補助、保護者負担の軽減と部活動運営資金の確保等

SIB プロジェクト（2年目）の活動内容と成果

- 令和7年度のSIBプロジェクトでは、那覇中学校・上山中学校の吹奏楽部員を対象に、毎週日曜日に若狭公民館で地域クラブ活動を行いました。2時間半の活動のうち、前半1時間半はジュニアジャズオーケストラの小学生と合同で活動し、後半1時間を中学生のみの活動としました。
- コンクールや地域行事などへの参加、アンケートによる検証、および関連図の作成を目指しました。プロジェクトの成果目標は以下の3つを立て、すべて達成しました。
 - 目標① 中学生15名以上の参加：20名参加
 - 目標② 2回以上の地域イベント参加：コンクールや地域文化祭、パレットくもじ前広場での行事でゲスト出演
 - 目標③ 満足度80%以上（生徒・保護者アンケート）：地域クラブで出場したコンクールなどへの行事に関して生徒は「とても満足」「やや満足」の回答が100%。通常の学校での部活と比べた時の満足度は「とても満足」「満足」との回答が81.8%。保護者に対するアンケートで、子どもたちが活動した行事等を振り返っての満足度は「とても満足」「やや満足」との回答が84.7%
- 本プロジェクトの効果として、専門家指導や他校交流による生徒の技術向上と自信、主体性の変化の確認、不登校生徒の居場所機能、教員の週末業務負担の軽減と教育効果の両立等が確認できました。

見えてきた課題

- 送迎負担の二極化、生徒の主体性の課題、運営費不足など、持続化に向けた制度的課題が明確化されました。地域移行の手順を踏むのではなく、制度として成立させながら進めるべきだと考えます。
- これまで生徒の主体性を担保する仕組みがなく、家庭や地理条件による参加格差が生まれる構造になっています。情報インフラの未整備、適正予算構造の欠如、日程設定の問題、そして高い属人性といった課題があり、学校単位での活動とのバランスや拡張フェーズの設計不足がわかりました。

【インタビュー】従来の部活との違い（プロによる専門指導の価値）

- 平良）民間が参画することで、従来の学校が行う部活動に比べても満足度が高かったですが、どの辺りに要因があると考えますか？
- 上原）一番はプロの演奏者から楽器を習えることが、学校も子どもたちも評価が高かったです。学校の先生がプロであっても全楽器の専門指導は難しく、外部講師を呼ぶと多額の費用がかかります。今回の事業では専門講師によるレッスンを4回実施できたことが良かったと思います。



- 平良) 将来的には地域移行のモデルとして、指導者が職業として成立する可能性は見えませんでしたか。
- 上原) 県内のプロの演奏家の一つの働き方になります。また、部活の吹奏楽がなくなるとプロの楽器プレイヤーを目指す人も少なくなり、音楽文化を支える人材も減る危険性があります。そのあたりも大切にしたいと思っています。

■労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団沖縄事業所の助成事業（お味噌と居場所づくり）



- 私たちは「味噌でつなげる地域拠点「よりみん」の温かい共助の輪 真和志地域における多世代コミュニティづくりプロジェクト」を進めてきました。
- 2023年12月から運営している「みんなのおうち『よりみん』」では、居場所づくり、仕事づくり、地域づくりの3本柱で活動しています。
- 本助成事業の応募のきっかけは、多世代型コミュニティの居場所づくりや豆腐のおからを活用したお味噌づくり、地域のブランドづくりなど、当団体の事業がSDGsの指標につながっていたからです。希薄化するコミュニティをもう一度取り戻したい思いから、居場所づくりとお味噌づくりで活動を行ってきました。

■試行錯誤から目標全クリア

- 1年目の助成事業開始時は、まだ試行錯誤の状況でした。居場所の利用者やおから味噌の製造販売も当時はささやかなものでしたが、助成事業に採択されたことで得られたものは本当に大きかったです。お味噌のアンケートでは期待や好評の声をいただき、ニューズレターの発行によって認知も広まり、結果として新しいお味噌の商品開発にも繋がっていきました。
- 事業実施の効果として、お味噌の美味しさを知ってもらえる場が増え、リピーターも増えました。おからを活用した仕事づくりや、働くことを意識した居場所の機能の強化など、様々あります。
- 2年目のSIBプロジェクトでは3つの成果目標をすべて達成し、大きな自信に繋がりました。居場所の活動、味噌の販売、SNSフォロワーイベント開催などの実績が上がり、取り組んで本当に良かったです。
 - 目標① 居場所活動での利用者やおから味噌関連で関わる人や接点を持つ人が増える:事業最終月までに100人/月達成
 - 目標② よりみんの活動を通して生まれたエピソードを集め、共有する場をつくる:2025年エピソード10本創出、2026年1月エピソード発表イベント開催
 - 目標③ 地域や関連団体又は個人と連携したイベントの開催:事業期間10回以上開催(月2回程度)

【インタビュー】ソーシャルビジネスの要「居場所と売上の相関関係」

- 平良) ソーシャルビジネスではまず売上を立てるのが定石ですが、「よりみん」は真和志地域の拠点としての活動との両輪が不可欠です。「拠点がありそのつながりから味噌が売れ、味噌が売れるから拠点が運営できる」という相互の循環を信じて、つながりの指標を成果目標に設定されたと思います。事業を振り返っての自己評価を聞かせてください。
- 城間) お味噌事業と居場所の活発さは完全に比例していました。居場所が活発になることで味噌の売上に繋がり、味噌の魅力がまた居場所に人を呼び込むという、まさに循環している仕組みづくりにこの事業でチャレンジすることで、それははっきりしてきたなという確信が持てました。特に「エピソード共有」という成果目標では、居場所や味噌作りに関わってくれる方に集まっていただき、活動を通じて感じたご自身の変化などについて教えていただきました。素敵なエピソードをたくさんいただき私たちの財産になりました。活動は間違っていなかったなという自信と確信になり、今後のモチベーションや糧になっています。



■これから助成事業に応募する人たちへのエールとメッセージ

- 上原) 出資者を集めるために事業内容が精査されて、事業をしっかりと進めていかないといけないという緊張感もありますが、その中で自分たちがやりたいことをもう一回見つめ直して進めていくという部分では、いい緊張感でした。文字にまとめることによって、再度見返した際に、忙しさに紛れてわからなかったことがわかるようになったと事業を終えて実感しました。
- 城間) これまでやってきたことを見つめ直してそれが弾みになったことと、那覇市や事務局（(公財) みらいファンド沖縄、NPO 法人まちなか研究所わくわく）のサポートがあったので、不安ながらも相談しながら安心して事業を進めることができました。また、那覇市と繋がっていることが、アピールの材料になり、信頼度アップにも繋がりました。SIB という新しい手法で取り組んだことが話題になってインパクトに繋がったというところでは、ワーカーズの組織内でも評価に繋がりました。波及効果がじわじわときますので、ぜひぜひ皆さんにもチャレンジしてほしいです。